

Assisted Reproductive Technologies in Lebanon

レバノンの生殖補助医療

Interviewee

Dr. Jessica Azoury
Azoury Clinic, Mount Lebanon Hospital

Q. 先生のご専門とこれまでのキャリアを教えてください。

生殖生物学の分野で博士号を取った。レバノンで理学士号を取得後、フランスのパリで研究修士号と専門修士号（いずれも生殖生物学）を取得した。その後、パリで博士号を取得し、ポスドク研究員を務めた。その後レバノンに戻り、国内最大級の体外受精クリニックであるアズーリ・クリニックのラボ・ディレクターとしてキャリアをスタートした。父親は、レバノンの有名な不妊治療医で、このクリニックの経営者だ。現在、このクリニックは、レバノンにおける体外受精治療の市場シェアの33%を占めている。

アズーリ・クリニックに勤務して約1年後、不妊症や体外受精のプロセスを説明する際に、患者が多く情報を必要としていることに気づいた。自分は、この分野のコンサルティングを開始し、患者に同行して、どのようなプロセスが必要で、どのようなことに直面するかを事前に説明した。また、体外受精の失敗を繰り返す患者にも、多くの指導と傾聴が必要であることに気づいた。現在の主な役割は、患者と連絡を取り合い、治療を通して患者に情報を提供し、サポートする

こと。これに加えて、ソーシャルメディアを通じてクリニックを宣伝するオンライン・マーケティング活動にも取り組んでいる。

Q. レバノンの不妊のカップルにとって体外受精はどのくらいポピュラーですか？ 政府からの補助はありますか？

ヨーロッパの一部と比較すると、レバノンの文化では子供を持つことは「自己決定」とは考えられていない。家族を築くことは基本であり、社会的なプレッシャーも大きい。その結果、人々は子供を産むためなら何でもする用意がある。結婚して3カ月以内に妊娠しなければ、警鐘が鳴り始める。

レバノンでは、体外受精に対する政府の補助金はない。レバノン政府はヘルスケアと一切関与しておらず、不妊治療にも助成はない。不妊治療はすべて民間で行われており、これには長所も短所もある。例えば、クリニック間の競争により、患者を惹きつけるために優秀性を追求するようになる一方で、治療を受けるためのかなりの経済的負担はすべて患者にある。

Q. 不妊治療に対するレバノン政府の態度は？

レバノンの体外受精医は、レバノン不妊学会に加盟している。同学会は、ART治療を提供する際の倫理的慣行に関するガイドラインと勧告を発表しており、レバノン政府はこれを採用すると公言している。その結果、体外受精クリニックは、レバノン不妊学会の勧告を採用することを自らに課している。

クリニックは、質の高い治療と高い成功率を提供することに非常に重点を置き



ている。このことは、レバノン社会における口コミの重要性を反映している。患者が身近な人からの推薦に基づいてクリニックを選ぶため、この業界で成功するには良い評判が必要だ。友人や親戚からクリニックの評判を聞いて、初めてソーシャルメディアに目を通す。そのため、クリニックは高い水準を維持し、結果を出さなければならない。

Q. 民間療法に頼る人は多いでしょうか？ どのようなものがありますか？

患者たちはその両方を少しずつ行っている。例えば、体外受精の治療を受け、その成功を祈る。一般的に言って、レバノンのカップルは医者が好きで、すべての検査を受けたがるので、漢方薬などにこだわることはあまりない。

自分の観察によると、レバノン人カップルは2~3ヵ月で妊娠しなければ体外受精クリニックに直行することが多い（その際、婦人科医すら受診しないことも多い）。また、レバノン人カップルは複数の医師から"チーム"で治療を受けることを好まない。

アズーリ・クリニックは包括的なサービスを提供している。アズーリ・クリニックでは、患者がIVF/ART治療を受けるために外部の産婦人科医から紹介された場合にのみ、連携して治療を行っている。

Q. 不妊の原因として多いのは？ 国民の間で、男性不妊に対する啓発は進んでいますか？ それとも、不妊の原因は女性だと考えられていますか？

この地域（アズーリ・クリニックはレバノンとイラクの両国で診療を行っている）で多くの男性不妊を観察してきた。

この地域の人々は多くの戦争を経験してきたため、男性不妊が多いのだろう。さらに、この地域の女性の約60%が多嚢胞性卵巣を持っている。

レバノン社会における男性不妊症に対する意識は進化している。アズーリ・クリニックは、認知を広めるためにソーシャルメディアで非常に積極的に活動している。これらの問題を広めるために、多くのビデオを投稿している。以前は女性が非難されていたが、徐々に変わりつつある。とはいえ、男性に問題がある場合、女性自身はそれを言いたがらないことが多いので、複雑な問題。社会的に夫のイメージを『攻撃』していると受け取られないように、むしろ黙っていたがるのだ。レバノンにはこのような感覚を持たない高学歴の人も多いので、一概には言えないが、男性のイメージを守ることに重点を置いた伝統的な考え方をする人もいる。男性が自分の問題だとわかっていても、それが彼の自己イメージや男らしさに影響するため、夫婦に多くの問題を引き起こすことがある。このような状況にある夫婦は、夫婦間の緊張を和らげるために安心させる必要がある。

自分の観察によると、カップルはどのような選択肢があるのかを、以前よりも意識してクリニックに来る傾向がある。例えば、5年前、余分な胚を凍結することをカップルに勧めるとき、そのアイデアはカップルにとって全く新しいものであったため、多くの議論が巻き起こった。現在では、カップルは自分たちのやりたいことが何かをちゃんとわかってクリニックにやってくる。これは、オンライン・メッセージが浸透していることを示している。

Q. 専門家は、体外受精をどこの国で学びますか？ 不妊治療は有望なキャリアとなりますか？

専門的なトレーニングを受けるなら、アメリカとフランスが主な選択肢。レバノンには主要な医科大学が3つあり、そのうち2つはアメリカと提携しているため、これらの大学を卒業した医師は、さらに研究を深めるためにアメリカに行く傾向がある。さらに、レバノンはフランスと歴史的に強いつながりがあり、多くのレバノン人はアラビア語を学ぶ前にフランス語を流暢に話すことができる。両国の間には良好な関係があり、パリもまた進学先として有力な選択肢となっている。

レバノンでは、公立学校のレベルは低いと考えられている。そのため、親は子どもを私立学校に通わせたがる。私立学校は、フランス式とアメリカ式の2種類に大別される。どちらのシステムに通うかは、将来どの大学に進学するかにも影響する。

レバノンでは、不妊治療を行う医師にとって、良いキャリアの展望がある。レバノンは比較的小さな国だが、すでに23の体外受精センターがある。レバノンはこの地域における体外受精のハブであり、周辺諸国では認められていない多くのことがレバノンでは認められている。レバノンでは、体外受精、精子・卵子提供、代理出産、第三者による生殖などが可能。とはいえ、レバノンには代理出産斡旋業者がないため、海外の患者がこのサービスを求めてレバノンに来ることはまずない。

アズーリ・クリニックでは、エジプト、シリア、ヨルダンからの多くの不妊患者を治療している。これらの国にはそれぞれ確立した体外受精センターがあるが、第三者による生殖は行っていない

ため、レバノンの医師を紹介されることが多い。

Q. 現在レバノンには何施設ありますか？ 実施サイクル数や成功率などのデータはありますか？

レバノン全土に23の体外受精センターがある。各センターは独自の記録を持っているが、全国レベルのデータはない。現在、レバノン不妊学会がそのようなデータの収集に取り組んでいる。

Q. 体外受精、生殖補助医療の法律・法案、ガイドラインはありますか？ 名前を教えてください。現在、法整備に向けて何か議論されていることはありますか？

レバノンの医師は、ヨーロッパと米国に頻繁に赴き、トレーニングを積み、それぞれの地域で採用されている規制の最新情報を入手している。レバノンの体外受精クリニックは、ESHRE、ASM、レバノン不妊学会のガイドラインに従っている。

Q. 生殖ツーリズムはポピュラーですか？ なぜ海外に行きますか？

レバノンの人々がART治療を受けるために海外に渡航することはほとんどなく、ごく一部の裕福な人々だけ。レバノンで体外受精（顕微授精）を受ける費用は、世界の他の地域と比較するとかなり安い。提供されるサービスも素晴らしい。1回の体外受精サイクルの費用は、すべての診察と標準的な超音波検査を含めて2000~3000米ドル（遺伝子スクリーニングやその他のオプション検査を除いて）。

Q. レバノンにおける宗教（キリスト教徒、ムスリム（シーア、スンニ））と不妊治療、特に第三者生殖との関係について教えてください。

宗教は、法律や規制の導入に関して否定的な役割を果たしている。レバノン不妊学会はガイドラインを作成しているが、法律の導入は議会を通過する必要があるため、事実上不可能だ。地理的に狭い国土に28の宗教がある。国会の代表である宗教団体の（時に過激な）見解を考慮すると、このテーマでコンセンサスを得ることは単純に不可能。これらの異なるグループの代表者たちは、何一つ合意することができず、ただ争い続けるだけなのだ。レバノンでは民法上の結婚すら認められておらず、宗教上の結婚だけが認められている。

一般的にキリスト教徒にとって、体外受精は禁じられているが、それでもアズーリ・クリニックにやってくるキリスト教徒の患者は多い。スンニ派のイスラム教徒は体外受精に問題はなく、精子や卵子の提供に対しても理解がある。にもかかわらず、体外受精に失敗して数年経つと、多くの人が諦める。シーア派のイスラム教徒は何でも受け入れる。

Q. シーア派の患者さんの場合は、国内で第三者にアクセスできますか？ これらはどのように行われていますか？

スンニ派のイスラム教徒は、自分たちの宗教的なコミュニティではタブーとされているため、最終的に第三者による生殖を選んだとしても、友人や家族には秘密にしている。

Q. fatwa は不妊治療を受けるカップルに対して、どのくらい影響力がありますか。

宗教指導者の中には患者に都合のいいようなファトワーを出す者もいるため、必然的にこれらの教えに固執する信者も出てくるなど、イスラム教徒に対して影響力がある。シーア派のあるイスラム指導者は第三者による生殖を認めており、そのためシーア派社会はこの慣習に何の問題も感じていない。対照的に、イスラム教スンニ派はそれを認めていないため、信者は最終的に譲歩したときに罪悪感を感じる。

アズーリ・クリニックでは匿名での提供が可能だ。女性不妊の場合、多くのイスラム教徒の患者は、夫の別の妻をドナーにすることを好む。もちろん、同意書には当事者全員の署名が必要だ。

Q. 不妊治療で余った胚はどうなりますか？

アズーリ・クリニックでは、残った胚をすべて凍結保存している。夫婦の気が変わり、もっと子供を持ちたい場合などのために、胚を廃棄することはない。自分は、受精卵を廃棄しないよう、夫婦と直接面談して説得している。

受精卵を提供する患者もいるが、非常にまれ。たとえ夫婦が家庭を築き終えていたとしても、提供には消極的だ。胚提供は、提供された卵子と精子を使って胚が作られた場合に行われる傾向がある。

当クリニックでは総合的な記録を保存しているが、これは極秘事項であり、将来的に人々を結びつけるために使用されることはない。すべての関係者は、完全な匿名性に同意している。

Q. 男性不妊について教えてください。精子提供を選びますか？ 養子をとりますか？ 子供がいない人生を選びますか？



それぞれの宗教がどのような養子縁組を認めているのか詳しくは知らない。一般的に言って、レバノンでは養子縁組はあまり一般的ではない。昔は望まない妊娠をした女性が教会に子供を手放すこともあったが、今では自発的流産(voluntary miscarriage)という選択肢もあるので、養子縁組はほとんどない。

Q.レバノンで行われている卵子提供と代理出産について教えてください。

代理出産は一般的な選択ではない。アメリカで時々見られるのとは違い、レバノンの女性は体重維持などのために妊娠を「避けよう」とはしない。アズーリ・クリニックは代理出産の斡旋はしていない。代理出産を希望するカップルは自分で代理母を見つけなければならないが、その代理母は親族であることが多い。自分は、子宮がなく妊娠できなかった26歳の患者を思い出す。その患者の叔母の一人は44歳で、未婚で不妊症だったが、ずっと妊娠を経験してみたかったので、彼女が代理出産となり、大成功を収めた。

代理出産のサービスに対して報酬が支払われる場合も確かにあるが、自分はそのような取り決めの詳細についてはよく知らない。アズーリ・クリニックは、すべての当事者に同意書を提供し、レバノン不妊学会が提供する契約書の書式に従うが、夫婦と代理母はそれぞれの弁護士を利用しなければならない。

Q.レバノンの生殖補助医療全般について、先生が考える課題は何でしょうか？

患者にとっての主な課題は、経済的な制約のために不妊治療にアクセスしにくいこと。経済危機のため、レバノンでは銀行ローンが利用できない。人々がどの

ように治療を受けるお金を工面しているのかわからない。2019年に経済危機が始まったとき、自分は、人々が治療費を払えないのではないかと懸念から、クリニックが存続できるかどうか、自問した。驚いたことに、患者たちは支払うことができ、仕事も問題なく続いている。レバノン人の多くは親族が海外に住んでいるため、資金の多くは海外からもたらされているのではないかと推測している。レバノンに戻って治療を受けるレバノン人も多い。彼らは優れたサービスを受け、特定の医師の評判をすでに知っている。

COVID-19のパンデミック時、アズーリ・クリニックのビジネスは20%減少したが、それ以降はCOVID以前のレベルに戻っている。

Q.その他

レバノンのIVFクリニックと他の地域のクリニックとの間には、ほとんど競争がない。例えば、イラクのクリニックに対する信頼は非常に低い。現在、彼らは新しいIVFセンターを建設し、拡大しているが、レバノンは師匠のような存在で、イラクは生徒のような存在。レバノンの医師は高く評価されている。

(2023年6月)

Dr. Jessica Azoury

セントジョセフ大学で理学士号を取得後、フランスのピエール・アンド・マリー・キュリー大学、パリ第7大学において生殖生物学修士号、生殖生物学の分野で博士号を取得。

現在、レバノンにおいて体外受精治療の市場シェアの33%を占めるアズーリ・クリニックのラボ・ディレクター兼不妊コンサルタントをしている。

論文

Jessica Azoury (2008) Actin filaments: key players in the control of asymmetric divisions in mouse oocytes. *Biol Cell* 101(2):69-76.

Jessica Azoury(2008) Spindle positioning in mouse oocytes relies on a dynamic meshwork of actin filaments. *Curr Biol* 18(19):1514-9.